

J **apanese text**

2019年 春/夏号 日本語編



**里山と海に抱かれた土地
葉山に豊かな暮らしを訪ねて**

撮影=大泉省吾 (p.44、46～47)、小林廉宜 (p.45、48～49)
文=編集部 文協力=神崎典子

p.044

神奈川県三浦半島の北西部に位置する葉山エリアは、温暖な気候から保養地として脚光を浴び、高級別荘地として発展してきた。その一方で、海と山に囲まれた昔ながらのオーガニックライフの光景が残る場所でもある。自然豊かな葉山に自らの心と体の居場所を見つけた二人の女性を訪ねた。

上：葉山の隣に位置する秋谷の山中にある築77年の日本家屋。ここにアトリエ「秋谷四季」を構える広田千悦子さんは日本の歳時記研究家。この縁側に座っていると季節をキャッチする五感が研ぎ澄まされていく。

下：ガラスの器に山で摘んだ季節の花を。目で涼を感じる初夏のしつらい。

右ページ：葉山と秋谷にまたがる峯山に暮らす矢谷左知子さん。自宅から延びる道の先には長者ヶ崎の海が。朝日、黄昏、月の光、そして漆黒の闇……一度として同じ景色と出会うことはないという。

p.047

**ここは、目に見えないものに心を向け、
形にならないものを感じることができる場所**

——広田千悦子

縁側に座って庭を眺めていると、風に乗って遠く波の音が聞こえてくる。深呼吸すると、先ほどまで降っていた雨に濡れた草木や土の香りに満たされる。山に雨が降り川に流れ込み、海へ注いでまた雨になる……そんな当たり前だけれども忘れがちな自然の巡りを、山から海まで歩いて10分ほどのこの地で体感しながら、広田さんは暮らしている。25年前、葉山への移住を決めたのは、この地を訪れたときに見た光景がきっかけだった。「その日は曇りでしたが、一瞬、雲の切れ間からスポットライトのように光が海面に差し込みまし

た。「天使の梯子」と呼ばれるその光景の神々しさ、息を呑むほどの美しさが今でも忘れられません」。

葉山での時間は、形にならない大切な物事を感じる暮らしだと広田さんはいう。「四季を彩る花を飾ったり、旬のものをいただいたり、季節の行事や習わしを大切にしたり。日本では昔から当たり前に行われてきたことを、ここにくるまで忘れていました。歳時記をもっと学びたいと思うようになり、今も学びの最中です。奥が深すぎて終わりがありません」。自宅の程近くに立つアトリエ「秋谷四季」がそんな広田さんの学びの場。海の見える縁側、シンボルツリーの大楠、苔むした庭、季節の草花——その一つ一つに気づきがある。「花をしつらえるとき、美しさを愛でるという気持ちだけではなく、草花に宿る力をいただいているという想いを抱きます。草花の命に気持ちを向ける、しっかりと見る、少しだけ手をかけるなど、些細なことに感覚を働かせること。目には見えないかもしれない、形にもならないかもしれない。でも私を包みこんでいるすべての自然と気持ちのやり取りをしながら、この地で私なりに「日本の和」「日本の歳時記」を掘り下げていきたいのです」。

ひろた・ちえこ

日本の文化・歳時記研究家。自宅近くにスタジオ兼アトリエを構え、暮らしの中から歳時記や暦、四季などを探究。新聞、雑誌などにエッセイを発表するほか、著書も多数。

(左)

左ページ左上：厄除けと福招きのためにお菓子をお供えて食す。葉山の老舗和菓子店、永楽家の「水無月」。水無月とは6月を指す和名。

右上：紫陽花が美しい梅雨の季節。古来伝わる門口守りの一つ、「紫陽花守り」を飾る。広田さんは毎年、家族の健康を願うという。

左下：苔の箱飾り。土と苔を敷いて起伏をつけ、季節の草花で箱庭に仕上げていく。「作っている間は自分の内面と対話しています」。

右下：広田さんが山の土で焼いた誕生仏。

(右)

上：紫陽花守りの作り方。まず願い事を心の中で祈りながら、紙に名前と生年月日を書く。

中：紙を折りたたみ、紫陽花の茎に巻きつけ、さらに全体を半紙で包む。

花の根元に水引を結ぶ。

下：出来上がった軒先や玄関に飾る。地域によって金運アップや商売繁盛、人気運上昇、健康祈願などいろいろな意味がある。雨の多い季節の心と体を整える習わしだ。

p.048

多様な植物たちが共生する聖域を 未来へ受け継ぐ、守り人として

——矢谷左知子

葉山・峯山の中腹の竹藪に囲まれた一軒家での矢谷さんの暮らしは、鬱蒼と茂る庭の植物たちの観察から始まった。人工的に整備するのではなく、自然を自然に任せるための観察。「様子をよく見て、旬の主役が引き立つように少し手を加え、あとは草花たちの繁殖に任せました。3年目くらいからでしょうか、草むしりなどしなくても、もともとあった多様な植物たちが共生・調和を始めたのです」

もともと野生の草から糸を紡ぎ、染め、布を織る作家として活動していた矢谷さん。山に入り、体を使って草と向き合い、草が自分の中を通過して次の形になるのが面白くてしかたなかったという。「けれど私にとっては、そういう草とのやり取りが大切で、作品はその結果でしかありませんでした。だから染織家と呼ばれることに次第に違和感を持つようになり、今は作家活動をお休み中。この環境の中で草にアプローチすることで、その先になにがあるのかを探求する日々です」。山に入るときは地下足袋姿、いいなと思う草があったらそのまま崖をひよひよいと登る。山で切り出した竹もすべて自分で担いで自宅まで運び込む。その不便さがいい、と気持ちよさそうに笑う。「夜は本当に真っ暗ですが、満月の日は月明かりに海が照らされて神秘的な、異次元の世界が広がります。こんな世界が残っているなんて、と今も毎日驚きと発見の連続。慣れることはありません」。

現在、定期的で開催している「草講座」は、参加者とともに草を使ったお弁当やお菓子をいただきながら草の話をしたり、糸作りのワークショップを楽しんだり。ここで半日を過

ぎせば、野生の草が語りかける何かに気づけるはずだと矢谷さんはいう。「これだけ多様な植物たちが調和を保ちながら共生しているこの庭は“聖域”だと感じています。自分の庭というよりもみんなに開かれた場所で、一時期私が預かっているだけ。守り人としてここに暮らしている感覚なのです」。

やたに・さちこ

「草舟 on Earth」主宰。草について学び、草から糸を紡ぐワークショップ「草講座」を開催している。現在は宮古島の在来馬で沖縄県の天然記念物「宮古馬（ミヤークヌーマ）」救援活動に尽力。

(左上)

国道脇の階段を50段、さらに緑が茂る急な坂道を登ったところにある矢谷さんのお自宅。入り口には「草舟 on Earth」と書かれた素朴な看板が。

(右下)

右ページ、上：峯山エリアの原生の木が残る庭。木々の間から海を望む、風通しのよい空間。

下左：独自の 방법으로野生の草から糸を紡いでいる矢谷さん。写真は葛や苧麻の糸。

下中：草講座でふるまう特製草弁当。庭で採れた野草や地元産の野菜などで作られている。里芋のコロッケ、ハコベと新ニンジンのパスタサラダの豆腐マヨネーズ和え、よもぎごま豆腐など、大地のパワーがぎゅー。

下右：ドクダミの花や月桃、ピワの葉をリカーに漬けて作った自家製の化粧水や万能薬。手前の小瓶はハコベと塩と重曹で作った天然歯磨き粉。